
赤い嘘

恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い嘘

【コード】

N0830S

【作者名】

恵

【あらすじ】

「あぶらあげ」兄弟篇の六譚目。

『紅葉山』もみじやまの草木が真っ赤に染まっている。
秋を迎えれば当然のこと。

紅葉で赤く彩られることから、この山はひとの子にそう呼ばれるのだから。

だが今の季節は春の終わり。

桜が最後に花を散らす時期である。

赤く染まって見えるのは、この地を包み込む気配によって。足元に息吹く草木すら本来の色を失い、赤く染まる。

昼と夜を奏でる羽虫たちも息を潜め姿を現さない。

異常事態にある山の事態を彼らも察知したに違いない。

その赤い山を見渡せる『大江山』に陣を敷き、千里眼で山を見つめる影がある。

『紅葉山一ノ宮麓』いちのみやふもと守夏、『豊山一ノ輪麓』とよやま（いちのわふもと）『浮冬』うきふゆ

そしてその背後に配下の茂野しげの、良峰よしみね、久照ひさてるの姿がある。

「そなたらは裏から回る手はずを取れ」

薄くのばした銀に墨を落としたような長髪の浮冬は背後の従者に命令を下すと守夏へ視線を投げた。

「それでいいな、守夏」

「構いません、兄上」

浮冬は確認したのは、正面から『紅葉山』へ単身で踏み込む覚悟を問いかけている。

風はない。

生ぬるい嫌な風だけが吹き付けてくる。

「嫌な風だ」

「と言つても、もう日を遅らせる訳にも参りません。あの方の過ちを一刻も早く止めなければなりません」

浮冬は兄弟の盃を躲した守夏へ視線だけ投げてみせる。

やはり守夏を動かしているのは未だに『紅葉山』への忠誠だ。

「……守夏、私は『大豊山』の第一の侍従として、『大紅葉山』に対して手を抜いて立ち向かうつもりはない。向こうもあれほど明確に敵意を剥き出しにしておるのだ。三朱とはいえ処断を辞さぬつもりだ」

「分かっております。それが兄上の責務でございましょう」

「お前はまだ、あの方を信じているのか」

「朱秦様は、このようなことを良しとされる方ではない。それは兄上もお分かりでしょう。『大豊山』も深く理解していらつしやうたからこそ、今日までこうして立ち向かうことを良しとされなかつた」
「そうだ、『大豊山』は今、深く悩み傷ついておられる。お前と同じだ守夏」

浮冬はすつと息を吸い、鋭い視線を眼前の『紅葉山』へやる。

「だから私は、ただ一つの信念のみで刀を振るう。『大紅葉山』は『大豊山』を苦しめ悩ませた。『豊山一ノ輪籠』としてそれだけは正しくこの眼で判断したことだ」

「正しきご判断であると存じます。だからこそ兄上もお分かり頂けませんでしょう、私の心の内を」

守夏の主『紅葉山』雅親朱秦は道^{まひち}を踏み外した。

だが守夏が稻荷神としての意識が芽生える前から、愛し慈しみ育ててくれた主。

その侍従である守夏は、主の間違いを正さなければならない。

誰かにそれを譲る訳にはいかない。

だがそれを為すには、考えを違える浮冬と別に動き、『紅葉山』に捕らわれた『葵山』とその分社を救い出す一向よりも早く山を駆け上がり、主と対面する必要がある。

『紅葉山』は守夏にとつては庭同然であつたが、それでも今眼前に広がるのは守夏が知る『紅葉山』の光景ではない。

迎撃をする準備が綿密に行われ、幾重も結界が敷かれていた。

敵意あるものが足を踏み入れればすぐにも『紅葉山』に追撃にやってきたことを知られるだろう。

山を抜けてから知る、『紅葉山』の堅牢堅固な作り。

ひとの子の深き信仰の形作る、敵対するものへの拒絶の結界。

「あのやつかいな結界を崩さねば、裏参道の配下も動きはとれまい」
浮冬の言葉に答えたのは、守夏ではなかった。

「『大紅葉山』の行いを、今あの山に残る従者たちも良いと思わぬものがおります」

進み出てきたのはここ『大江山』おおえやま 稻荷神鬼嶽おにだけである。

これから争いごとをしに向かう装束の浮冬や守夏とは違い、ゆるく着こなした着物姿の稻荷神であった。

「というと？」

「先日我が『大江山』へ密かに『紅葉山』の従者より離反の願いを申し出たものがおります、その者が結界を解く手はずを進めておると」

守夏は「名は？」と鬼嶽へ問いかけた。

鬼嶽はあくびでもしそうなほどに気怠そうな動きをして、口元を袖で隠し続けた。

「たしか三ノ宮の子狐、三ノ宮の警邏けいろうを勤める村上と申すものです」
浮冬が守夏へ「知っているか？」と問うので、守夏は首を横へ振った。

警邏というのは山の警備守護を預かる役職で、守夏のような侍従とは違い、身分の低い山の狐だ。

「離反者がいると見せる『大紅葉山』の策かもしれませんが」

「名前は覚えておこう。その離反が本意であれば向こうからこちらへ接触して来るだろう」

陣を提供している鬼嶽は、浮冬と守夏の会話を見守り戦略を練る二柱を見つめる。

これから自分の山の隣で争いが起きるのだから、もっと自衛に努めるべきだとも思ったが、鬼嶽にはそんなものは必要がない。

この『大江山』は鬼跋扈する百鬼夜行の山。

この山を預かる鬼嶽にとっては、隣の山の火の粉などあくびをしながらでも振るい払える自信があった。

「『大紅葉山』は処断されるのでありませんか？」

だが、結末は知っておきたいので知将へ問いかけた。

浮冬は垂れた髪を背に流す仕草をしてから「鬼嶽殿はどうされるべきだと思いませんか？」と問いかけた。

聞いているというのに問いかけるとは、雅ではないかと鬼嶽が腹の底で思い視線を隣の『紅葉山』へ投げた。

「『大紅葉山』は慧眼けいがんであらせられる。この度の行いが稲荷にとって外道だとしても、どこかに正統性を持っておられるのかもしれぬ」

「その正統性が、我らには理解ができぬ。どこに正義がある？ 筋があるというのか？」

「さあそれは私も分かりませんが、そうではないかと思うだけです。鬼嶽は口元を袖で隠したままうっすらと笑ってみせる。

「それに、『大豊山』も少し頭に血が上っておられるのでは？」

浮冬は鬼嶽の言葉に「何故であろう」と問いかけた。

「強引ではあれど、『葵山』を迎えた『紅葉山』がこの稲荷において第二位であると決定づけられたことが気に入らないのではないかと囁くものがおりますよ」

「……強引なる手段で得た長兄の立場に、何の意味があるか？」

「私が申し上げて居るわけではありません。あくまで兄妹たちの風の噂です」

はたはたと袖をふるい鬼嶽は笑う。

浮冬を怒らせても鬼嶽には何の得はない。

こうやって陣を敷く場所を提供しているのだから、味方であるという意志は貫いておかねば、よからぬ疑いの視線を向けられることになりかねない。

「何にせよ、今稲荷の世は分裂して乱れております。何かしらの結末を皆求めております。総本山を除く稲荷の侍従で双壁を為す守夏

殿と浮冬殿が早々の解決をして下されば、それに優る安心はありませぬ。すまい」

鬼嶽はそれだけ告げて背を向けた。

「最強の義兄弟の活躍が、目と鼻の先で見れるとなれば、不謹慎なれど私は楽しみです。では、何かあればお声がけあれ」

いつも鬼嶽がゆっくりと居眠りに使う己の社殿は、浮冬が『豊山』から連れてきた配下たちで埋まっている。早々に解決して去ってくれるのが一番落ち着くというものだ。

昼寝もできない殺伐とした己の社殿から意識を切り替える。

『紅葉山』社殿へ耳を澄ます。

『紅葉山』から赤子の泣き声が聞こえた。

泣く我が子をあやそうとする母親の横顔は、白く抜けるように美しい。

白銀の髪に青の瞳の女性は、まだ生まれて半年も経たぬ赤子を抱いてなだめていた。

隣にっていた侍女の松緒まつおも一緒になだめようとするが、赤子は一向に泣き止む素振りはみせない。

泣き疲れて寝てしまうのを待つしかない。

「幼子は気配に敏感であるからもう、殺気立つ空気に怯えておるのかもしれぬなあ」

御簾を潜って人影が増える。

長く美しい金色の髪に、赤い瞳。

身の丈は六尺八寸。董色の着物を着たこの『紅葉山』の主、雅親朱秦である。

部屋にいた高貴な女性と松緒は揃って頭を下げた。顔を上げているのは泣き止まない赤子だけである。

「どれ、時雨。高い、高いをしてやろっ」

『紅葉山』が女性の手から赤子 時雨ときぐれを抱き上げると欄間に届くかというくらいに高く抱き上げた。

だが、泣き止むどころか両手を振って暴れる始末だ。

「嫌われてしまったのう。やはり咲夜がよいのか、おのこじやのう」

『紅葉山』は手の中の時雨をそつと、母親である『葵山』清祥咲夜さくやへと戻す。

咲夜は時雨を抱き留めたが視線は『紅葉山』を見て離さない。

彼がこの『紅葉山』奥の院まで足を運んできた理由が、ただ赤子の様子を見に来ただけとは思えない。

「村上、席を外しなさい」

咲夜の指示に部屋の隅に控えて沈黙を守っていた若い侍従が立ち上がった。

去ろうとするのを『紅葉山』が止める。

「よい。そなたもここにおれ」

『紅葉山』の言葉に村上は頷き、再び座敷についた。

大きな瞳を『紅葉山』と咲夜、そして手の中の時雨へ投げる。

「さて、今更確認をすることでもないが、それでも確認をしておく」

『紅葉山』は座敷にゆつくりとあぐらをかくと、懐の扇を引き抜いて逆の手に置いた。

「『豊山』からそなたを取り戻しに侍従の浮冬ら余名の使者が山を囲っている。再三協議を突っぱねたからかう、もはや話をする為此こへ来たわけでもなからう。私を処断してでもそなたらを連れ戻すつもりでいる」

咲夜は俯いて、時雨を抱きしめる手に力を込める。

震える肩を松緒がそつと撫でる姿を見ながら、『紅葉山』は続けた。

「そなたは、ここで『豊山』からの使者を受け入れ、時雨と共に『豊山』へ下れ。よいな？」

返事はない。

村上が少しだけ首を傾げ咲夜の顔色を伺うようにしてみせる。

返事の代わりに咲夜の華奢な手が伸びて『紅葉山』の着物の袖を

掴んだ。

震える手が袖の紅葉山水の柄を揺らした。

「妾はここに残ります」

「ならんと言うのに。時雨は『みかど』の子。ひとの子の血を引いている。この先を踏まえればそなたは『豊山』に下るのが良いのだ。いやそれ以外にはない」

「それでも、お兄様が妾を庇うことで、誹りを受け処断されるくらいならいくらあの方の子だとしても、妾の手でいっそ……一緒に……」

咲夜の言葉に『紅葉山』は扇をもつ手を離して俯いて猛る咲夜の顔を押しさえた。

ぐつと顔を押し上げられて、涙に濡れて真っ赤になった顔と視線が合った。

「愚か者」

優しくそれだけ言うと、咲夜には効果があったのか震える小さな唇からため息と共に殺意が零れ落ちて消えた。

「何があってもそれだけはならぬ。よいな松緒、咲夜は芝居がうてぬかもしれない。そなたに咲夜と時雨の命掛かっている」

「松緒、この命に代えても。『紅葉山』の御厚意を無碍むげには致しません」

「村上、そなたも心得ておるな。無駄にこの山の子狐たちの命を道連れにはできない。皆を『豊山』へ下らせるようにうまく役をこなせ」

村上は主の言葉にゆっくりと時間をかけて頷いてみせる。

「私は『紅葉山』の狐。生涯変わらずその役をこなしてみせます。

『紅葉山一ノ宮麓』のように惑うこともありません」

「村上は、守夏が嫌いか」

『紅葉山』が笑うと、村上はゆっくりと笑顔を作ってみせた。

「『紅葉山』はおっしゃいました。守夏様は巻き込めないと。

理解できません。『紅葉山』の『寵愛厚ちゆうあいき侍従で、あの御方は御

出自も総本山という立派な稲荷神。ひとの子の血を引く稲荷などを、容認できる訳がありません」

ひねくれた物言いであった。

自分は寵愛されていないので最後の最後までここにいるのだというようにも聞こえる。

だが村上はそれを示唆していたわけではない。

「ですが、私は違います。生まれも育ちもここ『紅葉山』。あなた様の為に生まれ、土を食い育ちました。この土地を離れて誰の侍従になろうとも、噛みしめた土の味を忘れる愚鈍ではございません。

守夏様にはできぬこと。『紅葉山』出自のものたち全て、それを分かっております」

「立派な従者でございますね、侍従の器を持っておられる」

松緒の言葉に、『紅葉山』はやんわりと微笑んだ。

「我が心の丈を理解してついてきてくれたからこそ、そなたら山の狐たちにも迷惑をかけたくはない。頼んだぞ」

村上は『紅葉山』の燃える瞳を見つめ、深く頭を垂れた。

「さあ、私も立派に芝居を打とう」

「兄様」

手の中の時雨を松緒に託し、立ち上がる『紅葉山』に咲夜がすりついた。

ぎゅっと兄を抱きしめると、『紅葉山』は寂しそうな笑顔を浮かべ抱擁を返した。

「妾の業をお許し下さい」

「許すのは私ではない、『みかど』でもない、いつかその子がそなたを許してくれる」

『紅葉山』の言葉に、次から次へとあふれ出る涙が止まることを知らない。

いくつも頬に涙の筋を作り着物を濡らした。

「咲夜」

確かめるように、『紅葉山』は咲夜の名前を呼んだ。

もう、こうして抱きしめることはできない。

同じ部屋に身を置くこともできない。

「私は」

続きをどう言おうか、『紅葉山』は惑い、咲夜の心を曇らせるだけだと思い飲み込んだ。

その代わりに倦怠な眠りを咲夜へ送り込むと、抗うことなく咲夜は『紅葉山』の手の中で眠りに落ちた。

奥の院でも最も深い処にある座敷牢へとその身を運び横にすると、松緒の手の中で泣き止まない時雨の柔らかな新芽のような髪を撫でた。

まだ赤子で毛並みも整わない。

だが撫でられたのが気持ちよかったのか、時雨は一瞬泣き止み大きな瞳で笑ってみせた。

「やつと笑ってくれたのう、時雨」

『大江山』鬼嶽が浮冬らに与えた情報は間違いがなかった。

『紅葉山三ノ宮麓』に進んだ彼らの前に、村上と山の狐たちの姿があった。

『大紅葉山』の所業にはもうついてはいけなにする山の狐たちを連れ、誠意として山に敷かれていた結界を解いて現れた。

守夏は身内である狐たちを労い、『紅葉山』を離反した村上を呼んだ。

『紅葉山』の計略である可能性もまだ否定できない。呼びつけた村上はまだ年もゆかぬ若い侍従で守夏に傳くと淡々と受け入れを感じ謝してみせた。

「今、『大紅葉山』を守るものたちは」

「誰ひとりとしてごさいません。こうして守夏様はじめ『大豊山』の庇護に下ったものばかりでございます」

「『葵山』はご無事か？」

浮冬の問いに村上は頷く。

「奥の院の座敷牢に、分社時雨様と侍女の松緒殿と、捕らわれおいでです」

「なんとということだ」

浮冬が顔色を変える横で守夏はぎゅっと目を閉じてその様子を想像しないように努めた。

そのような乱暴を働く主ではなかったと、今でも信じている。

村上はその悲痛な守夏の顔を無表情で見つめていたが、すっと立ち上がって浮冬に問うた。

「我らの身の上は、保証頂けるのでしょうか」

「結界崩落の功を立てれば当然である。『大豊山』に十分な褒美と計らいを伝えよう」

村上がにっこりと笑ったので、守夏は村上の前に立ち声を荒げた。

「そなたは、己の出世の為に『紅葉山』を裏切ったのか」

「裏切ったのは『紅葉山』でございます。非道たる行い、秩序を乱す自分勝手な振る舞い。我らは見限ったまでのこと。守夏様それはあなたも同じではございませんか？」

守夏は村上の刃のような切り返しに、返答を返せない。

侍従であれば、主がどのような行いをしてもついて従うべきだと村上が言っているのが分かる。

村上のように身分の低い子狐達であれば、忠節を誓う必要もないだろうが、守夏のような侍従は違う。

「さて 守夏は『紅葉山』を裏切ったわけではない。これはまだあの方を信じているのだ」

浮冬の言葉に村上は心底驚いた顔をしてみせた。

守夏は詳細を語る様子は見せず、浮冬らを置いて先に石段を駆け上がっていく。

結界が消えれば、あとは守夏の知らぬものなどこの山には何もない。

「我らは『大紅葉山』を処断する気持ちでここにおるが、守夏はまだ説得をするつもりでいる」

「……無駄なことです」

「山の狐であるそなたもそう思うか」

「たった一時でも、己の判断だけで主の側を離れた侍従には、説得などすることはできないでしょう。側にずっといた我らでさえ、どうすることもできなかったのですから」

「どうか。守夏が率先して『大豊山』の処へ直参し頭を垂れて詫びて居らねば、今ここに居るのは我らではなく『大豊山』ご本人。烈火の如く『大紅葉山』を処断されたに違いない。守夏の行動は主の為のものだ」

「侍従というものは、面倒くさいものでございますね」

村上の率直な意見に、浮冬は笑ってみせた。

「相手があのような、奇行をされる御方ではなおさらな」

浮冬は『紅葉山三ノ宮』へ陣を張り直すと、体制を整えて再び進行をはじめた。

守夏は石段を駆け上がる。

『葵山』を助け出すことなど、正直二の次である。

それは兄である浮冬たちがすればいいこと。

『紅葉山』の侍従である守夏の優先すべきことではない。

”そなたは、かけがえのない、私の大事なたった一柱の侍従だ”
胸に刻みつけた主の厚い信頼の言葉。

たった今放たれた言葉かのように、今も胸を高鳴らせるといふのに、今は苦しみすらある。

”私には、守夏があるから他に侍従はいらない”

どこへ行くときも、何をする時も手足となった。

ひとの子の願いを叶える主の側に、ずっと付き従っていた。
主の存在が、誇りだった。

『紅葉山』の侍従であることが、存在する全てだった。

”そなたが大好きだ”

視界が広がる。

石畳の左右に玉砂利が敷かれ、嵐に負けず聳える朱塗りの巨大な鳥居と社殿が守夏を迎える。

息を整えて、周囲を警戒しながら本殿へ足を踏み入れた。

手前から最奥まで一列に並んだ蠟燭の明かりに照らされて、変わらぬ容姿で主が一服していた。

ふう、と紫煙を吐くと煙管を傾け、『紅葉山』は影になっている守夏へ声をかけた。

「よく帰ってきたな、守夏」

「……朱秦様……」

「勝手に飛び出して、勝手に戻ってくる。そのように躰をした覚えはなかったが、向こうの侍従らを鈴なりに連れて何をしに戻ってきた」

上座に座っていた『紅葉山』が立ち上がると、守夏は一步後退した。

「……この度の『葵山』奪取の件、訳あつてのことと、今一度お話をさせて頂きたいと『大豊山』に申し上げて参りました」

守夏は息を飲み、『紅葉山』の返答も待たず続けた。

「朱秦様が直接お話できぬ事情であれば、この守夏が再び名代になります。深い理由があつてのこと、どうか守夏にその真実をお話下さい」

揺れていた蠟燭の炎が、沈黙とともに直立する。

必至の形相の守夏をよそに、『紅葉山』は気怠そうに首を傾げる。

「咲夜が欲しかった。『豊山』より先に、咲夜を私の嫁にしたいと思立ったから奪った」

それが説明のつもりなのだろう。

『紅葉山』はそれだけ言っつていつものように笑顔を投げた。

「すでにそう『豊山』に告げたが、あれは聞いてはいなかったのか？」

「それは、あまりにも……『大豊山』を傷つけ、『葵山』の尊厳を

踏みにじっておるではありませんか。あなた様らしくない。違います」

「私らしさとはなんであろう」

絹地が擦れる音がして、『紅葉山』は守夏の前に立った。

「私は変わらぬぞ」

美しい金髪も、赤い瞳も確かに変わらない。

袖を広げて『紅葉山』はいつもと変わらない所作で守夏の頬に手をあてると、優しく撫でた。いつもその愛撫を心易く受け入れていたが今はそう思うことができない。

『紅葉山』を信じることができない守夏の気持ちは表情に滲み出ていて、当然それを『紅葉山』も察知していた。

「私の侍従でありながら、余計な采配をしたものだな守夏。私は『豊山』に詫びるつもりも咲夜を手放すつもりもない。これで万事良いと思っているのだ」

「そのような、童子のようなわがままは、貴方の中にはないはずですよ」

「そなたの評価など、私は求めておらぬ」

頬に優しく触れていた手が離れ、胸を軽く押されて突き返される。突き放されて守夏は呆然として、次の言葉が浮かんでこなかった。「何があなた様を狂わせたのですか。『葵山』の美しさですか、長き時の流れで心を病んでしまわれたのですか、私がお支えするに足りなかったのですか」

「うるさいのう……」

気怠そうに『紅葉山』は呟いて守夏へ鋭い視線を投げた。

「私の邪魔をするのか、守夏」

「ま、間違えておられる、朱秦様は間違えておられます。すでに山の狐もあなた様の奇行に不審を抱き山を降りました。全てがあなたを裏切っているのです、お分かりになりませんか、間違えておられるのです」

守夏は『紅葉山』に声を上げると、駆け寄って足元に跪いた。

「どうか、間違いをお認め下さい」

額を本殿に擦りつける守夏を見下ろして、『紅葉山』はため息をついた。

「もう一度言おう、邪魔をするな。このまま引け。乱暴をする気はない。私の考えが相容れぬならば私の侍従を辞めて『総本山』へ戻るがいい」

「嫌です」

守夏は下げていた頭を勢いよく上げた。

美しい白銀の髪が、蟬で照らされた本殿の中でいっとう明るく輝いた。

しかしもつとも透明さを持って輝くのは、守夏の青い瞳からあふれようとする涙だ。

「止めてみせます。私の『大紅葉山』が過ちの歴史を刻むのであれば、命をかけて止めてみせます。それが『紅葉山一ノ宮麓』の責務でございます」

守夏の目に炎が宿り、下段から光の一閃が放たれる。

『紅葉山』はそれを躲して守夏との距離を取った。

完全に避けたつもりであったが、一閃は『紅葉山』の頬を切りするりと血が流れて落ちた。

争いで生まれた揺れが奥の院にも届いたのか。

命の危険を感じたのだろう、赤子の泣き声が守夏の耳に届いた。

『紅葉山』分社時雨の声に違いない。

守夏は引く姿勢を見せない。一層にこの場を制圧しようとする気配が膨れ、殺意にも似た力が場を支配する

びゃあびゃあと、暴風に撫でられる柳が揺れるように泣き声は止まない。

何を疎んで泣いているかは、誰でも分かる。

この社殿を取り巻く殺気に命の危険を感じているのだ。

『助けて、怖いよ』

時雨が本能的に泣いて叫ぶその悲鳴は、本能的で純粹な願い。

時雨の『生きたい』という願いを叶える為に、こうして守夏と向かい合っている『紅葉山』にとっては、麻薬を打たれるような感覚にも似ていた。

平素『紅葉山』が保っている、自我が酔ったように遠のいていく。目の前にいるのは、自分にとってたつたひとりの侍従である守夏。それでも時雨を脅かすのであれば、泣かせるのならば、排除せねばならない。

排除して時雨の命を守らねばならない。

そう己の中の神の本能が渦巻いて、理性を淘汰しようとする。

「泣き止んでくれ」

そんな願いが、時雨に届くわけはない。

守夏を穩便に引き下がらせたいと願う『紅葉山』の思いは、時雨の願いに押し殺されていく。

ひとの子の血を引く時雨の願いは、自身の願いを凌駕する。

布地の繊維を遡り染み渡る水のように、心を失わせる。

額を押さえ、抵抗するように呻くに似た声を上げる『紅葉山』。

「諦めてくれ、守夏」

守夏はゆっくりと近づいた。

「私は止まりません。この手であなた様を狂わすものを処断する心も決まっております」

赤子の泣き声が静寂の本殿に響き渡る。

守夏の殺意は、この本殿だけには留まらず咲夜や時雨にも向いているのが分かった。

「守夏……そなたの願いは叶えることはできない」

額に当てていた手がするりと重力に従うと『紅葉山』は真っ白な顔で、恐ろしいほどに無感情な瞳を守夏へ投げていた。

守夏が初めてみる目だった。

そこに感情という色は一切ない。

守夏は本気で己を排除をするつもりなのだど悟った。

初めて、怯えという感情を覚えた。

自然と足が一步一步と距離を取り、自身が安全と思える間合いを取ろうとする。

術を放つために広げて置かねばならない手を、無意識できつく握りしめていた。

「本当に、あなた様は」

『葵山』が『紅葉山』を変えてしまったのか、私利私欲の生き物に。

「……………」

『紅葉山』の唇が何度か動いたのが守夏の視界に入る。と共に充分にとつた距離は、その唇が動く瞬く間に無となった。

主の鼻が己の鼻を掠めた。

理解しようとした次の瞬間に、守夏の体は外へと放り出された。

巻き起こした風が本殿の蝋燭を吹き消す。板間を破り玉砂利に叩きつけられて守夏の体は二回、三回と跳ねて石段前まで転がった。

何が起きて、どこをどう捻り飛ばされたのか守夏には全く分からない。

立ち上がるうとして右肩に痛みを感じ、肩を押さえられたのだと考えたところで、守夏の寸前に再び『紅葉山』の姿が具現化していた。

「ひっ」

恐れから、守夏は生まれて一度も上げたことのないような悲鳴を上げた。

目の前の『紅葉山』の瞳は守夏を見てはいるが光がない。

操られているかのようにただ赤い瞳が燃えている。

「お願いです」

声が震えていることに気づく。

次の瞬間に己の心臓が『紅葉山』の手の中にあっても、何の違和感もない絶望感が支配していた。

「どうかいつもの慧眼の『紅葉山』にお戻り下さい」

守夏の望みを聞き届ける素振りはない。

「地位や名誉や欲などに駆られる方ではなかった。そうではありませんか」

『紅葉山』が守夏の腹に手を当てた。

するりするりと手を這わせて着物の衿が交じわう胸あたりで手を止めた。

心臓のある位置からは少しずれている。

だが守夏はすぐに意図を理解した。

再び間合いを取ろうと動こうとするが動けない。

すでに守夏は『紅葉山』の放った術中にはまっていた。

腹を優しく撫でるようにあてがわれていた手に力がこもる。

『紅葉山』の手は守夏の腹部を貫いた。

盛大に飛び散るはずの血潮はなく、『紅葉山』の手は輝きの中にあつた。

差し込む手は目にも見えぬ早さであつたというのに、引き抜く手には重さが生じるのかゆつくりと手を引いていく。五臓六腑を焼く痛みに、守夏は呻いて目尻から涙が落ちた。

守夏の『中』にあつたのは、ひとの子が『紅葉山』に奉納した宝具のひとつ。

侍従が守り預かるという、信頼と契りの証でもあつた。

守夏にとっては物理的に『紅葉山』と繋がる証であり、『紅葉山

一ノ宮籠』を名乗る根拠でもある。

これを主に強引に奪われるということは、すなわち侍従としての契約を断ち切るということとなる。

「やめ……て下さい」

宙をもがくように、守夏は手を『紅葉山』へ向けるがその手が『紅葉山』を捕らえることはない。

「やめて下さい……、朱秦様、私を、あなた様から切り離さないで下さい。あなた様と、私の、千年を」

”そなたが大好きだ”

”私も、朱秦様を愛しております”

ぶつりと糸が切れるように、守夏の体が玉砂利に落ちた。

『紅葉山』の手の中には紅葉を細工した雅流麗な刀がある。

無感情な瞳で『紅葉山』はその刀を見つめて、無造作に刃を放り捨てた。

「あなた様と……私の……」

痛みに呻きながら守夏は『紅葉山』の足に食いついた。

繋がりを強制的に断たれ、守夏には先ほどまでのように山を感じることはできない。

暖かに感じられていた全てが酷く冷たく感じるのは、山への繋がりを失ったからではない。

千年に及ぶ侍従を越えた信頼関係を、たった一手で無慈悲にも断ち切ったかつての主への形にできぬ憎悪によるものだ。

たったひとりの侍従を地に這わせ、それでも『紅葉山』は無慈悲な視線を湛えたまま見下ろしている。

「あなた様と私の間柄は、こんな、無慈悲に裂かれてしまうものは、なかったはずです」

玉砂利を握りしめ、守夏はあらんばかりの力を込めて立ち上がった。

開け放たれた衿を直すこともできず、よろめいて守夏は構えた。

「よく……も」

苦しみと、痛みと、踏みにじられた思いに守夏は腹の底から呻いた。

「よくも私を好きだなどと、その口で……千年の間……紙くずのように捨てられるものに、愛情をかけたなどと……」

渦巻く痛みと苦しみに、守夏は一度口の中に溜まった血潮を吐い

て続けた。

「私を……」

いくら吠えても、何も返してはくれない主。

何を言われても否定としかもう受け止められないと分かっているも、求めようとすると己の弱さに守夏は呻いた。もう一度大好きだとそう言われたいだけだ。

必要だと言われたいだけだと、そんな下らない感情だと分かっている。

立ち上がったものも、体を支えることはできず守夏は膝をついた。

『紅葉山』は何も言わない。

ただ、時雨の泣き声だけが嵐のように『紅葉山』に響いている。

裏参道から『紅葉山』を急襲する命を得た茂野、良峰、久照は、二ノ宮に足を止めていた。

三竦みを止めたのは『紅葉山』に残る従者たちだった。

彼らは守夏の配下であり、罪がないことは承知であったが、邪魔をするならば越えてゆくしかない。

「儂が思うに、兄妹たちの瞳は曇ってはおらぬ」

久照は良峰が陰陽術で吹き飛ばし、良峰が心の臓を破った侍従に寄りそう評価する。

「こつまでして儂らを食い止めようとするとは、信じるべき真まことなくては、できぬことではないかのう」

葡萄色の袴を翻し、絶命した侍従の頬についた泥と血を払い瞳を伏せる。

袖に印された『紅葉山』の包み稲に紅葉の紋が焼け焦げてぼろぼろと石段に落ちる。久照は丁寧に礼を払い石段から横の紅葉の木へ横たえて、両手を重ねて眠らせてやる。

「その真とは何でございましょう。それは存在するのでしょうか」
良峰の言葉に、久照はううんと首を傾げ再び石段を駆けぬける。

「守夏様が、今も信じておられるものでしょうか」

茂野が問いかけると久照は山を駆けながら頷いた。

「そこまで！」

加速しようとした三柱の足を、石段先で止める声。

並んでいたのはまたも狐たちであったが、装いは今までの下級の従者たちとは違う。

銀に青の浪文様。ずらり石段に並び手に揃いの長刀を構えた六柱の女武者たちである。

額に揃いで巻かれた青鉢巻きは、『吉良山』の稻荷紋である。つまりこの山の稻荷ではない。

「我ら先代『吉良山』侍従六柱。『大紅葉山』に恩義あり、この先は一步も進ませはしません」

「吉良女衆か、やっかいなものが守りについている。ここは私に」率先して前に出たのは良峰である。

「茂野に露払いを任せるにも、このおなごらは手に余ろう」

茂野は反論しなかった。久照も良峰も一回り以上鍛錬を積んだ経験がある。

おそらく一列に並びこちらを威嚇する女侍従たちは、茂野より経験も力もあるのだろう。

「茂野は久照様をお守りして奥の院の『葵山』を」

「承知」

石段に良峰を残し、左右に飛んで久照と茂野は山頂へと飛ぶ。

女侍従たちもわざわざ追うことはしなかった。

一柱でもここに食い止めることができれば充分だと判断していたのかも知れない。

「そなたら、『大紅葉山』が道外れた行いをされ我らがそれを正しに参っていることは、承知の上で刃を向けておるのだろうな」

良峰の問いかけに、女たちは顔を寄せ合ってみせると喉を掻くようにして笑う。

何を面白いことを言っているのだろうという笑みである。

「我らすでに亡き『吉良碧海姫』の侍従。新しい『吉良山』も我ら

の気持ちは充分に承知の上送り出して下さいました」

「ただ、死ぬためだけにこの場で壁になると？」

良峰の言葉に無粋ですと笑う声がする。

「我らは『吉良碧海姫』が愛した『大紅葉山』を命ある限りお守りする。それだけのことです」

「私、『大紅葉山』直々に加寿帝良^{カステラ}を頂いてしまったもの。お力にならない訳は参りませんわ」

「私だって『大紅葉山』に碧海様が良くして下さいったこと、忘れてはいませんもの」

「私たちにだっていつも、美味しい銘菓をお持ち下さった方ですわ」

「あんなにお優しい方は、他どの稲荷を捜してもおりませんもの」

まるで井戸端会議でもするかのように口々とさえざる女侍従たちに良峰は目を細め威嚇した。

場の緊張感を乱す女の高い声は、何より嫌いであった。

だが、良峰は先ほど久照らと話をしていた「真」というものを理解した。

この二ノ宮へ至るまでに足止めに散った山の狐たち、そしてこの侍従らは、『紅葉山』の行いを信じている。

守夏のように疑問を持つことを知らないとも言える。

ただ無垢に信じているのだ。

悪ではないと。

愚かしいことだと思える。

だが、ひとの子の信じる力で存在する己たちの根本を突き刺すこの行動を、良峰が非難することはできない。

それもまた、生き方のひとつだ。

「つまり、悪だと分かって肩入れしておる。処断は覚悟の上ということだな」

「悪とは、何です？」

一柱が問う。まるで話す順序すら定めていたかのように次々と掛け合いが続く。

「主に仇為すものの思想全てが悪ですか？」

「それとも、規則に定まらぬものが悪ですか？」

「それとも、己が愛さぬものを愛するものが悪ですか？」

良峰はゆっくりと「心を汚すものが、悪だ」と答えた。

「それならば、貴方様も悪です」

六柱の中央にいた女侍従が一步石段を下りて良峰を見据えた。

先ほどまでの「あんみつも追加」というような陽気な空気はどこにもない。

「私、さきほどあなたが心臓を食い破った従者の許嫁でありました」

良峰は懐から白刃を抜くと、燃える瞳のおなご六侍従に切っ先を定めた。

引くつもりは、一切ないようである。

「そなたらの仇の名覚えておかれるとよい。『豊山』三ノ輪参道守良峰。加減は致さぬ。覚悟めされよ」

「そなたの冥府の道行きは、我ら『吉良碧海姫』六侍従がお勤めいたします。椿、蘭、菊、百合、桜、菫、参る！」

久照と茂野が足を止めたのは、後方で良峰の気配が消えたと感じた為ではない。

再び進行を妨害する影があつてのことである。

一ノ宮裏参道の取水口に優雅に立つ稲荷の姿。

『大江山』鬼嶽の姿である。

ゆるやかに着こなす着物姿とけだるそうに煙草を吸う仕草は、仙女のように柔和な印象があるが鬼の大江山の異称を得ている彼に、暖かさはない。

冷たい眼差しが、茂野と久照を貫いている。

「儂らが苦勞して登山してきたというのに、また随分お早くお着きのご様子ですな」

久照の言葉に「ううん？」と鬼嶽は首を傾げた。

「まあ、『大江山』と『紅葉山』は隣同士。古くから縁もある。縮

地細工を使えばそれ簡単に飛んで来れるものよ？」

くると右手で回転させた煙管は、銀の細工が施されている。

縮地細工と呼ばれるそれは、道中に行く苦勞を短縮して、細工を持ち合う山同士で瞬時の移動を叶える稲荷の至宝である。

「御加勢頂ける訳では……ないでしょうか？」

「ああ、うん。こちらとすれば、どちらがどうなるうが、関係がないのだが……」

ゆっくりと鬼嶽がこちらへ降りてきたので、茂野は久照の前に立ち構えた。

「『大豊山』の勢力が増長するのもしかと思う節があつてね。『大紅葉山』にはまだ役目も残っているのだからある程度はがんばってもらわなきゃならないと思つて」

久照は鬼嶽の口上の何割かを理解できなかつたが、鬼嶽が今のこの大事ではなくその先を見ていることだけは分かつた。

「私は、私の役目を果たさなければならぬ」

限界まで近づいて、鬼嶽は久照を守る若い侍従の顔を丹念に見つめた。

「知らない顔だ。この大事に遣わされたということは手練れなのだろう？」

「『豊山一ノ輪』神楽殿かぐらでん守護方、茂野一門の長子でございます」

「ああ、あの神楽殿か。何度か請われて舞を披露しに行った際に見事だと思つた」

鬼嶽はそれだけ言うと、にっこりと笑む。

「『葵山』清祥咲夜はこの左手の門から入り、奥の院へ至る方が早く助け出せよう」

道行きを指刺す鬼嶽に、茂野は警戒をしてみせる。

だが久照は茂野の肩を押して、先へ行けと押し出した。

「手柄を譲つてやるとは、権威に興味のない『豊山三ノ輪麓』久照らしい潔さ。やはり学者筋は手柄にうるさくなくて見て居てよいのう。日頃、草をもしつて術やら薬やらを研究するものが、いきなり

武芸仕事とは足腰、堪えはしないか」

「『大江山』は何をお考えでおられるのか」

「私が何を考えておるかということより、『大紅葉山』が何を考え、今に至るをかを考える方がよいのではないかな」

「『大江山』にはそれが察しがついていると仰せか」

「分かるよお」

鬼嶽は囁いてから、空を見上げる。

結界は崩され、空には満天の星空。

「本当だったらこの場にいる稲荷誰もが分かるべきことだ。聞こえるじゃない、泣き声が」

「『紅葉山』分社の、泣き声ですか」

「稲荷神であるのにあの願いを聞き届ける耳を持ってなくなってしまった。我らは、ひとの子らのように腐敗してしまっているのかもしれないね、久照」

久照が顔を上げると、そこには狐面を手に風に髪を揺らす鬼嶽の姿があった。

幽玄たるその装いに添えるように、この年最後の桜の花が散ってゆく。

その狐面が、何を示しているかは久照も知っている。

知って居るがこの世に生を受けて数百年、初めてその仮面をつけるものの素性というものを知った。

白狐の仮面をつけ稲荷の世を走るもの、総本山『不死見』が持つ直轄の組織『五狐奉行』。

各地に布陣されその素性も組織の人数も明かにはされていない。

だが一度その姿が確認されれば、その全ては『不死見』が把握するものとなる。

久照は瞬時に事態を理解した。

鬼嶽を置き去りにしたまま『紅葉山』のいる本殿へと駆けだした。

茂野は奥の院裏から中へ忍び込み、座敷牢近くへ到達していた。

正面本殿ではすでに衝突が起きているのか地響きが足から、手から肌から伝わってくる。

その度に泣く時雨の声で茂野は『葵山』の居場所をすぐに導き出すことができた。

襖を開き中を窺い中へ中へと進むと、「誰です」と厳しい声がかかった。

「『豊山一ノ輪』神楽殿守護方、茂野　そなたは『紅葉山』のものか」

「いいえいいえ、『葵山』の松緒と申します。ああ、助けにきて下さったのでございますね」

茂野の言葉に松緒は声を上げてすがりついた。

「松緒殿、『葵山』は」

「この奥に、早く早く姫様をお助け下さい」

松緒は奥の襖を開き、格子に囲まれた座敷牢に伏せる『葵山』の元へ茂野を導いた。

『葵山』は時雨を抱いたまま伏せている。

茂野はその様子に息を飲んでしまったが、すぐに気を取り直し左手の甲へ手を重ねて術式をくみ上げた。

『丸菊』の術と呼ばれる炸裂破で格子を吹き飛ばすと、座敷牢へ飛び込み『葵山』を抱き上げた。

「『葵山』、助けに参りました」

『葵山』に意識はない。

ただ頬は涙に濡れていて悲痛さが伺われた。

茂野はこうして『葵山』の睫一本一本を確認できる距離で顔を見たことがなかったので、その悲痛さに合わせて噂以上の美しさに息を忘れた。

他どの美しきものに例えることもできない。美しい姫君だ。

それをこれほどまでに苦しめ篡奪するとは『紅葉山』とは、どれだけに性根の腐った長兄なのだ。茂野は奥歯に力を込めた。

敵うものならば、今すぐにでも正殿へ向かい一太刀浴びせたいも

のだが、それが敵う力量でないのは承知のことだ。

今は『葵山』を助け出すことだけが茂野の任務だ。

松緒が早く外へと催促する声に我に返ると、時雨も抱き上げて牢を出る。

見知らぬものに抱き留められて、時雨がまた泣き出した。

「一刻も早くこの山から分社の君と姫様を出して差し上げて下さい」

一ノ宮取水口にいる鬼嶽と久照と合流しようとして来た石畳を戻ると、そこには鬼嶽の姿しかない。

「『大江山』、久照様は」

「正殿へ浮冬殿を助けに向かわれた。おお、これは『葵山』松緒、大事ないか」

鬼嶽に問われ、松緒は二度大きく頷いた。

「その子が 『紅葉山』分社か。この距離で見るのは初めてだな」

松緒の腕の中の時雨を鬼嶽が覗き込む。

鬼嶽の持つ力が怖いのか時雨はまた泣いた。

「おお、泣かせてはならぬな。泣けば泣くほど、『大紅葉山』は苦しまれる」

鬼嶽は時雨を抱いたまま、松緒の手を引いて裏参道を駆け下りる。

茂野も『葵山』を抱いたまま急いでその後を追った。

「お力添え感謝申し上げます」

「私は何もしていないよ。『大江山』鬼嶽はいつでも、『紅葉山』の傍観者さ」

時雨の泣き声が遠ざかるにつれて、『紅葉山』は自我を取り戻しつつあった。

離れていく愛しい妹の気配を、意識のどこかで探っている。

紅葉、葉の合間、合間。

石段を下りていく複数の足音は、己の心臓の音にも似ている。

ひとの子の、赤子の願いというものはどうしてこうも貪欲なのだろうか。

いつもなら足を一步動かせば玉砂利が音を立てるのだが、境内にすでに玉砂利はない。

爆ぜて飛び散ってしまった。

剥き出しの土肌を踏むと柔らかな土の感覚が返ってくる。

視線を四方に投げる。

倒れているのは、守夏だけではない。

『豊山一ノ輪籠』浮冬の姿もある。

加勢した浮冬は今にも膝を地につきそうな深い傷を受けて、それでも守夏を守り、『紅葉山』を睨み付けている。

腰まであつた長く美しい黒銀の髪は、斜めに肩のあたりで切り裂かれている。

『紅葉山』は自分が何をどうやって侍従たちを傷つけたか覚えてはいなかった。

だが周辺の惨状を見て、己に傷の一つもないことを考えれば自ずと想像はついた。

時雨の生きたいと願った思いを妨害する侍従達を、一掃しようと体が動いたのだろう。

守夏は浮冬に守られながら、かつて『紅葉山』と並んで月見団子を食した大岩にうつ伏せになって体を横たえている。

『紅葉山』に手の感覚が戻ってくる。

暖かいのは血潮に濡れていたからか、それとも激しい攻防を繰り広げたからか分からない。

「守夏」

自然と『紅葉山』の口から名前が零れる。

その言葉に浮冬が異常な反応を示した。

「これ以上守夏に触れるな！」

浮冬の声には激しい憎悪と侮蔑が込められている。

「己の従者の左目を抉り骨を断つとは何という惨い仕打ちを。悪狐め、もはやそなたを三朱とも長兄とも、眷属とも思わぬ」

声は震えていて、今にも涙が落ちてしまいそうなほどに瞳は潤ん

でいる。

猛将として知られた『豊山一ノ輪麓』浮冬が怯え涙する姿など、見ることができたのは『紅葉山』だけに違いない。

激しい慟哭と共に、浮冬は折れた白刃を振るい近づこうとした『紅葉山』を退けた。

「そうか」

『紅葉山』は己が無意識のうちに守夏を退けた際にした所業を受けて、乾いた唇でそう返した。

右手を染める血は、では守夏のものに違いない。

だが『紅葉山』の淡泊な返答は浮冬の怒りに止めどなく火をつけるだけだ。

きつく齒を食いしばり、守夏を守る盾となつて『紅葉山』と対峙した。

折れて切つ先をなくした白刃を突き出し傷だらけで構えを取っている。

「しかし、生きてはいる」

「侍従の誇りも、生き様すらも主に奪われた守夏によくもその口で生きているなどと言える！」

「怯えておるのか？」

『紅葉山』は分かりやすい挑発をした。

本当なら守夏に己の幕を下ろしてもらおうと考えていたが、守夏はやはり主には敵わなかった。ひとの子の願いを叶えるために心とこの制御を外し暴走した己を止めることはできなかったのだ。

咲夜はすでに山を降りた。もう何の心配もない。

不自然でない状況であれば消えることすら惜しくはない。

浮冬が構える白刃は震えて金属が触れあう音をたてている。

『豊山一ノ輪麓』といえど『紅葉山』とは格が違うのだとこの場を観劇するものがいればそう思っただろうが、残念ながらこの場でそれを見つめるものは誰もいない。

闇に染まった深い緑と、赤黒い鳥居だけが『紅葉山』と浮冬を見

下ろしていた。

「怯えてなど、い、い、いないっ……」

赤い瞳がまつすぐに浮冬を貫き、浮冬は応えたが声が震えた。情けないと己に叱咤しても、心が体を制御しない。

これは完全に恐怖というものだと思っ。

「兄だな、浮冬。守夏であればすぐに怯えていると言った」

それを守夏への侮辱だと認識したのか、浮冬は白刃を握りしめる手に力を込め主の名前を二度唱えて『紅葉山』へと駆けだした。

「浮冬殿、そこまでです！」

だが刃が『紅葉山』が届く前に、久照が声を上げ浮冬の手を止めた。

平素であれば久照の腕など簡単に払い捨てることができるが、それはできない。

「なぜ止める！」

「『葵山』の奪還は成功しました。もうこの場に残る理由も、『紅葉山』に刃を向ける理由もありますまい。ご自身の負傷がどれほどのものかもお分かりでしょう」

「あれはもう、我らが長兄にあらず！ここで切って捨てねば安寧はない！」

「落ち着いてください」

「止めるな久照、この悪狐は『葵山』を強奪し、己の従者を踏みにじり道を踏み外した！ここで首を落としておかねば……おかねば……！」

浮冬は冷静さを完全に失っていた。

『葵山』は取り戻した。

そして浮冬の義弟守夏が大事であれば今すぐにも処置を施さなければ命を失うことにもなりかねない。それは浮冬自身の命も同じだ。

このまま『紅葉山』を殺しても、何の利益もないのだ。

『紅葉山』は割って入ってきた久照を見つめ、冷静にこの場を見

ている彼の存在をありがたいとも、邪魔だとも思った。誰が彼を差し向けたのかは想像に容易い。

傷ついた体でまだ立ち向かおうとする浮冬に、久照はぎゅっと目を閉じ短く謝罪を入れてから眠りを叩き込み昏倒させた。

最強の侍従兄弟は共に意識を失い、地に落ちた。

「次の相手は、そなたか……？ 『豊山三ノ輪籠』 久照」

芝居がかかった言葉だと、久照は思いながら首を横に大きく振った。「耳を澄まし、儂にも真の声が届きました。『紅葉山』 分社の声。胸に響くあの声は、儂らの根本を突き刺すもの。ひとの子の、願いでありましょう」

『紅葉山』は一步だけ久照に近づいた。

「それを知ったとなれば……時雨を、処断するか」

「いえ、全ては『総本山』がお導きになることであり、儂が口を出すことではありません」

「では『豊山』には子細を伝えるか」

「逆に貴方はどうされたいのか、聞いてもよろしいか。『大紅葉山』あなたは真に添い、摂理に従ったまでのこと。罪は ありますまい」

久照は冷静に伝えてみせたので、『紅葉山』は小さく頷いて、身を翻し半壊し瓦礫と化した本殿へ腰をかけた。

「罪ならある」

視線は守夏と浮冬を指している。

傷が深い浮冬は、このままでは間違いなく死に至るだろう。『豊山』に戻るまでに息があれば幸いと言える。

最後に『豊山』との別れはさせてやりたいとは思ったが、それは『紅葉山』が口にできる言葉ではなかった。

『紅葉山』が言える言葉は、かつての侍従に寄せる本当にわがままな一言だけ。

「守夏と咲夜を頼む」

「それが、貴方のお望みか……。儂が貴方であればここで、いつそ、

命を」

「それは誰も望んではおるまい。ひとの子がそれを望んでおるなら
まだしも、そうではないのだ」

久照はゆっくりと頷いて守夏と浮冬を抱き上げた。

「『大豊山』が、ご温情をおかけ下さるに違いありません。しかし
そうなった時、守夏様は『紅葉山』をどれほど恨まれるでしょう」

「それでも、悪狐の侍従として列せられ誹りを受けることはないだ
ろう。忠義のために悪と罵られるには惜しいのだ。守夏は 立派
な、私の 大事な侍従 なのだから」

『紅葉山』が下げていた顔を上げると、久照が抱き上げた守夏の
青い顔が見えた。

血雫で真っ赤に染まった装束に手を伸ばして、そつと傷をなぞっ
た。

「その時が来たら、私を殺しに来るとよい守夏。お前にはその権利
がある」

久照はさつと浮冬と守夏を抱いたまま表参道の石段を駆け下りる。
足音が聞こえなくなるまで、『紅葉山』はその方角をじつと見つ
めていた。

静寂が訪れる。

侍従たちは誰もいない。

ただ、ただ、紅葉が擦れて葉を振るわせている。

誰もいなくなつた『紅葉山』山頂本殿。

誰も彼を責めるものも、慰めるものもない。

見つめるものすらいはないというのに、『紅葉山』は泣くこともせ
ずにただ立ち尽くしていた。

再び、ひとの子の願いを叶える為に。

『大江山』鬼嶽は『総本山』に呼び出されていた。

いつものような緩やかな着付けから離れ、稻荷神としての尊厳に
あつた衣装に身を包み参道に行く。これも『五狐奉行』元締の仕事

の一つである。

呼ばれた理由は当然のように、先日の『紅葉山』での抗争に関する調書のためである。

兄妹達の支持は圧倒的に『豊山』にある。

だが一部では『豊山』が事を大きくしすぎただけだとか、嫁入りの順序くらいで多勢無勢で押し入るとは、と『豊山』の起こした行動に批判もあった。

渦中の『葵山』清祥咲夜は『紅葉山』より救い出されてから口を聞かなくなってしまった。侍女松緒の評定による発言が、『葵山』の発言とされることになる。

『豊山』への嫁入りを心待ちにしていた『葵山』を略奪し踏みこじつたと涙ながらに告げたが、信頼と真の心為しに成立しない『紅葉山』分社時雨がいることから、『葵山』に『紅葉山』への心が全くなかった訳ではなかったとされる一面もあった。

事態が長引けば『葵山』を苦しめるだけだと、『豊山』は全ての判断を『総本山』と総本山直轄『五狐奉行』へ投げた。

「ご報告いたします」

『大江山』鬼嶽は手にした書簡を持って、『総本山』本殿で『母上』と向かい合った。

傍らには『総本山』侍従三柱が座し、鬼嶽をじつと見つめている。「この度の事変におき、『紅葉山』ノ宮籠、『守夏』負傷、『豊山』預かり。『紅葉山』二ノ宮守護朝霧討死。『吉良碧海姫』六侍従うち四柱討死。『豊山』一ノ輪籠、『浮冬』討死、『豊山』三ノ輪参道守良峰討死致しました」

『総本山』侍従三柱にとって、守夏と浮冬は子である。

だがそこに子を失い、または傷つけられた恨みなどないよう、無表情のまま報告を聞いていた。

「他に攻め込まれた『紅葉山』の被害はないのか。山の狐たちはどうなった」

「直前に浮冬の陣へと寝返りをして受け入れられておりますので、

殺生された様子はありません」

「なるほど、ということとは『紅葉山』で死んだものは、その守護を担った朝霧なる従者だけか」

「そういうことになりますでしょうか」

『総本山』侍従の問いかけに、鬼嶽は淡々と応える。

「一方で『豊山』は一の侍従である浮冬と従者良峰を討たれているとなると、『豊山』の腹の虫はこの裁決では収まらぬかもしれませんな」

「しかし、数で語るはどうであろうか……この度の事は『紅葉山』の一方的な略奪に対し、『豊山』が同じように一方的に略奪し返したと言ってもいい攻勢であろう。報告によれば、そのほとんどを『紅葉山』が一柱で対処したと聞いている。侍従が側添えをしたわけではない」

裁決に意見を交わす三侍従たちを、鬼嶽は黙って見つめている。

それぞれ言うことは正しい。

結論、けんか両成敗となった。

総本山の決定となれば、どの兄妹も反論することはできない。

どちらにも総本山から罰することなかった。

季節は巡り、秋を迎える。

かつては山の狐も従者たちも数多くいた『紅葉山』はほんの一握りの山の狐と、たった一柱の稻荷神によって支えられていた。

それでも変わらず美しく紅葉するさまを、隣の『大江山』から鬼嶽は見下ろしていた。

『紅葉山』が微笑む横顔に変化はないと思っても、それが嘘だと知っている。

『紅葉山』にも『ひとつの心』があるのだと、それを見極めるのが『大江山』が総本山『不死見』からの勅命である。

いつかその嘘を真の心で塗りつぶし、救うものがあるとすればそれもまたひとの子の心なのかもしれない。

ひらりと着物の袖を翻し、鬼嶽は己の侍従に声をかけた。

「悪いが私は、そなたら侍従や兄妹を思つて一柱で永遠を生き抜こうなどという技は成せぬから、嘘をついて生きることではきんぞ」

突然理解に苦しむ一言を投げられて、侍従は首を傾げてしまった。「稲荷は嘘をつけはしません。ひとの子の願いを紡ぐ我らに、嘘というものはないのですから」

「それはそうだな」

燃える紅葉山の色は、ひとの子がたまに口ずさむ『真つ赤な嘘』に相應しい色に染まり燃えている。

「ではこう言おう。あの山の主がつく嘘は『赤い嘘』というのだ。稲荷神であるが故、それを全うするために貫く意志を『赤い嘘』とな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0830s/>

赤い嘘

2011年4月15日06時49分発行